

「オネエ所長の調査ファイル」 # 3 6

山崎浩治

「オネエとして言わせてもらうけど、壁ドンに胸キュンする最近の女は大丈夫？ 壁ドンなんてオレオレ男の圧迫面接でしょ。あたしが壁ドンされたら、エイヤツて足を踏んづけちゃうわ」

「オネエなんて言っても、しょせん女心は分からないんだな。あのな、おっさん、壁ドン男なんてファンタジーなんだよ。いまどきの男は傷つくことを恐れたガラスのハートの草食系。だから、女はファンタジーの世界にだけ、ワイルドな男を求めるんだ。リアルに壁ドン男がいるとすれば、そいつはきっとDVヤローよ」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が金沢市内で聞き込み中だ。この日の市山は黒のブラウスとタイトスカートにカーキ色のトレンチコートを羽織って、ボタンをとめず無造作にベルトを結んでいる。お気に入りのディートリッヒ・スタイルだ。

数日前、「金沢プライベート・リサーチ」を訪れた金沢市に住む依頼人・由美子(52歳)が語った。

「娘が大学を辞めて、結婚したいと言っています。相手の男性はしっかりとした会社に勤める好青年で、主人とも話し合っただけで結婚を了承しました。それが急に『あの人と別れたい』と言い出し、理由を聞いても教えてくれません。何があったか調べてください」

娘の若葉(21歳)は大学3年生。友人の紹介で知り合った健斗(28歳)と1年前から交際を始め、トントン拍子で結婚話まで進んだが、その後、沈痛な表情を見せるようになった。しかし健斗に誘われるといまも会いに出掛けているらしい。

健斗は東京の有名私大を卒業後、地元老舗企業に就職して2年後に会社役員に就任。社長は父親だから、次期社長の座が約束されている。周辺に聞き込むと「さわやかな好青年」ともっぱらの評判だった。調査の合間、沙織が言った。

「老舗の後継ぎなら玉の輿よね」

「彼は『どうせ社長夫人になるんだから、大学なんか辞めて早く結婚しよう』とプロポーズしたらしいわ」

「依頼人の娘は若いから、まだまだ遊びたいんじゃない？ 別に結婚してるわけじゃないんだし、彼氏が嫌いになったんならさっさと別れればいい。いまもデートしてるのは好きだからでしょ」

「沙織は女なのに、女心をまるで分かっていないのね。別れたいのに別れない。それは別れられない理由があるからでしょ」

◇ ◇

「あなたはリベンジポルノを恐れている。違うかしら？」

数日後、若葉を「金沢プライベート・リサーチ」に呼んだ市山が開口一番言うと、彼女の肩がびくと震えた。若葉はおとなしそうな雰囲気をもった美人である。話すかどうか逡巡した

末に、沈んだ声で語り出した。

「別れたら、あたしの性的な写真をネットに投稿する、と彼が言っています」

「やっぱりね。正直に話してくれて、ありがとう」

若葉がためらいがちにスマホに保存された写真を見せる。ラブホテルのバスラブに若葉と健斗と一緒に入っている写真だった。相手を信頼しきった、あどけない表情で若葉が笑っている。そのほかにも若葉の下着姿や二人がキスしている写真もあるという。

「リベンジポルノは『撮らせる側も悪い』と非難されがちだけど、あなたは彼を信頼しただけ。悪いのは、その信頼を裏切ったヤツよ。あなたは彼と別れたい？」

「別れたいです。でも、彼が納得してくれません」

「交際相手が『別れたい』と言えば、自分がどれだけ好きでも別れを受け入れなきゃならない。恋愛の終わりに相手の同意なんかいらぬの。それが恋愛の掟」

救いを求めるように市山を見つめる若葉に市山が言った。

「すぐに警察に被害届を出しなさい。彼がやっていることは明らかな強要罪。積極的に処罰を求めるなら刑事告訴してもいいけど、今回は被害届でいいと思う」

「……はい」

「でも、それだけでは警察は動いてくれないかもしれない」

市山がデスクの上にファイルを置いた。

「被害届と一緒に提出しなさい。彼に関する人物情報をまとめておいた。こうしたケースでは、警察が動きやすいようにお膳立てすることが大事なの」

◇ ◇

大学の友人に誘われて参加した合コンで健斗と出会った。アドレスを交換し、その日のうちにデートの誘いが来た。迷わずOKしたのは、健斗が高顔面偏差値、高学歴、高収入の高スペック男子で、断る理由などなかったからである。付き合ってみると、健斗にはオレ様体質のところがあったけれど、老舗の跡取り息子なんてそんなものだろうと高をくくっていた。

「若葉の大学は、どうせ大したところじゃないから中退しろよ。結婚してオレが養ってやるから」

交際1か月でプロポーズされ、大学中退こそ保留にしたものの、将来的に結婚することには了承した。その途端、健斗の感情の起伏が激しくなった。LINEの返信が遅い、デートの途中でスマホを見た、大学の男子学生とLINEしている、スカートが短い。そんな取るに足らない理由で怒り出すことが増えていく。

健斗は人前では愛想よく快活だが、外では怒りを出さずにため込み、若葉の前だけで吐き出すのだ。何が彼の逆鱗に触れるか分からないので一緒にいると神経を磨り減らした。大学の男子学生には「彼がいるから、もうLINEしないで」というメッセージを健斗の目の前で送信させられたこともある。自宅や大学にいても「いま、どこにいる」「何をしている」としよっちゅう、LINEを寄越す。一度、スマホを自宅に忘れて大学に行った日には、半日の間に100件以上

のLINEが送られていた。

気が付くと、「LINEは5分以内に返信する」「男とLINEや電話をしない」「風呂に入る時はオレの許可をとる」といった二人だけのルールが増えていた。少しでも反論すると何時間も理詰め説教されるので、面倒臭くなってルールを受け入れたのである。そしてそのルールを破ったと言っては、難癖をつけてくるのだ。

さすがに「これは異常だ」と思って別れ話を切り出すと、「ごめん。心を入れ替える。若葉がないと生きていけない」と泣き落とし。「それほど愛されているのなら、もう一度彼を信じてみよう」とやり直すものの、しばらくすると、いつものように束縛が始まって同じことの繰り返しだった。ある日、「絶対に別れる」と決めて別れ話を切り出すと、「それなら若葉の裸の写真をネットにばらまいてやる」と健斗が言った。

それは交際を始めたころ、戯れで撮った幾枚かの写真のことだった。彼が喜んでくれるなら「ま、いいか」と軽い気持ちで撮影したのである。一日も早く健斗と別れたいが、写真を公開されるといふ恐怖があって、デートに誘われると断れない。そして会えば、必ずセックスを求められた。健斗は「子どもができたなら、でき婚すればいい」と避妊を嫌がるから、若葉はこっそり経口避妊薬を服用している。もしそれがバレたら、「セックスでは避妊しない」という新たなルールが加わるのだろう。

「会う時間が少ないから、うまくいかないんだ。結婚すれば、きつとうまくいくよ」

最近、健斗はよくそう言う。本当だろうか。若葉にはよく分からない。

◇ ◇

「若葉につまらない入れ知恵をしたのはあんたですか。赤の他人が人の恋愛に口を出さないでください」

「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた健斗が尖った声で一気に言った。あからさまに貧乏ゆすりをして、苛立ちを隠さない。さわやかな好青年の仮面は脱ぎ捨てたのだろう。市山がぴしゃりと答えた。

「何が恋愛よ。笑わせないで。あなたのやってることはDVよ」

「オレは若葉に手を上げたことは一度もない」

「殴る蹴るだけが暴力じゃない。気に入らないことがあると大きな声を出して怒る。彼女のスマホの履歴やアドレスを勝手に消す。これは精神的なDVじゃなくて？」

健斗がぐっと詰まった。

「別れるなら性的な写真をネットにばらまくと相手を脅すのは正真正銘の犯罪よ。その証拠となるあなたからのLINEは警察に提出済み。首を洗って待っていなさい」

健斗の貧乏ゆすりが激しさを増した。

「もう一つ付け加えておく。あなたが過去に交際した女性たちから、あなたのDVに関する証言も得ているわ。あなた、デートに5分遅刻した元カノにノート2ページの反省文を書かせたんだって。別の女性からは、あなたが作った『ルール』を証言してもらった。『他の男に脚を見せ

るな』『異性はもちろん、同性の友達と飲みに行かない』『セックスで避妊しない』……別れ話の最中にあなたが送った罵詈雑言のLINEやメールも入手したけど、見てみる？」

凍り付いた健斗の目を見据え、市山が言った。

「今後、あなたが若菜さんの写真をネットに投稿したり、SNSで彼女をディスったりしたら、こちらが持っているあなたのDV記録もネットで公開させてもらう。ううん、それだけじゃない。会社、取引先、家族、親戚、友人、大学の先輩・後輩、あなたの関係先にもれなく送って、あなたの本性を白日のもとにさらす。そのためにあなたの人間関係はすべて洗い出したの。探偵、なめんなよ」

◇ ◇

警察の捜査が周辺に及んだことを察知した健斗はあわてて両親を伴って若菜の家を訪問して謝罪、彼女と別れることを約束した。警察は健斗が謝罪し、反省していることを認め、今回は逮捕を見送った。しかし再び交際を強要したり、私的写真を公表したりした場合は即刻逮捕することを健斗とその両親に念押ししている。

「あの人から連絡は一切ありません。あきらめてくれたのだと思います」

若葉から電話で報告があったのは半年後のことである。明るい声だった。それが彼女本来の声なのだろう。市山が言った。

「今回、あなたは幸運だったわ。相手が失うものが大きい老舗企業の御曹司だったから良かったものの、人間関係も社会的地位もなく、失うものが何もない相手だったら、別れた腹いせに写真をネットに投稿されたかもしれない。これからは好きになった相手だからって簡単に信用し過ぎないことね」

市山は健斗と話し合った日、スマホに保存された若葉の写真をその場ですべて削除させた。とはいえ、パソコンに取り込んでいたらスマホの写真だけ消しても意味はない。若葉が所有する写真を使って定期的にネット上に公開されている類似写真を画像検索したが、幸いヒットはしなかった。しかし健斗の友人グループのLINEで公開されたら把握のしようがない。そして一旦ネットに拡散した画像の削除は現実的に困難である。若葉の写真がこの世界から完璧に消去されたという確証が得られない以上、若葉はいつネットに流出するか分からない恐怖を抱えて生きていくしかない。

一方、健斗はいま、街コンや合コンに足繁く参加しているという。数か月後、市山と沙織が様子を見に行くと、健斗は高校時代の友人たちとともに相席居酒屋で20代女性のグループと談笑していた。

「懲りないヤツね、あいつ」

沙織がうんざりした声で言うと、市山が答えた。

「DV男は常に支配する相手を求めている。女は強くなったと言われるけど、DV被害に遭う女性は減らない。それだけ弱い男が増えたのね。女たちがあのDV男の毒牙にかからないことを祈るのみよ」